コミュニティスポーツに関する一考察 その1

——個人の内的条件に対するコミュニティスポーツ政策——

新　谷　崇　一

Ⅰ　は　じ　め　に

1970年以降，政策過程に「コミュニティ」という言葉があてはめられてから10年以上たつ今日，一般市民にもこの言葉は抵抗なく受け止められるようになってきた。

「従来の古い地域共同体とは異なり」，「生活の場において，市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として，地域性と各種の共通目標をもった，開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団」と解されるこの「コミュニティ」は，地域社会におけるスポーツ活動にも深く浸透してきている。

「旧来の農村でみられたタイプのスポーツ活動は，ムラの和や総合を目的とした」ものであったが「共通の地域への結びつきの感情と共通の目標とをもって共通の行動をとろうとする，その態度のうちにみられる」今日のスポーツ活動は，まさに地域社会を基盤として行われる，いわゆる「コミュニティスポーツ」と言える。

しかし，コミュニティスポーツを唱える場合，住民と行政との間の需要と供給のバランスが非常に問題となってくる。一方的な押しつけによるコミュニティスポーツ政策（以下C，S政策と略す）では行政側の空回りにすぎず，逆に，住民の強い要求にもかかわらずそれに対応する施設，用具，指導者が備っていなければ満足できるスポーツ活動とはならない。また，施設，用具，指導者という物質的な問題だけではなく，住民側の個人個人のスポーツに対する意識がコミュニティスポーツ発展の大きな要因ともなる。

本研究（その1）では，個人の内的条件からC，S政策を展開するが，この場合の内的条件とは個人を中心として，それに付随する精神的，肉体的，社会的側面にまで及ぶものである。

本研究で使用する資料は，昭和57年7月より実施した福島市蓬莱町居住者のスポーツ実態調査（調査者，新谷崇一）によるものである。

調査対象者は18才以上65才未満の男女578名（学生は除外）。回収は，男性180名，女性192名，回収率，64.4%である。調査対象者の性別，年令別構成数は表Ⅰ－1の通りである。

表Ⅰ－1　性別，年令別構成数

M・F	18～24才		25～29才		30～34才		35～39才		40～44才	
人	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
	4	7	21	34	59	54	38	29	26	27
%	2.2	3.6	11.7	17.7	32.8	28.1	21.1	15.1	14.4	14.1

45～49才		50～54才		55～59才		60～65才		計	
M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
15	22	11	7	6	8	0	4	180	192
8.3	11.5	6.1	3.6	3.3	4.2	0	2.1	48.4	51.6

Ⅱ　スポーツ実態調査から得られる個人

1．調査対象者のスポーツ意識

スポーツに対する意識を問う場合には二通り考えられる。第1に，個人がスポーツをどのように眺め，自ら表現することができるかどうか，つまりスポーツをいかに把握しているかということから生まれる意識，第2に，第三者からスポーツについて幾つかの概念を与えられ，その中から自分の考えに適合したものを選択してできあがる既成概念としての意識の二つとなろう。

本研究では，対象者が不特定多数の一般市民であることより，後者の方法にて調査を行った。故に，対象者は多数であるがスポーツに対する意識は一方的ではあるが，ある傾向が現われてくるものと考えられる。

以下，男性180名，女性192名はどのようなスポーツ意識を抱き，またそこにはどのような相違がみられるかを概観してみる。

まず，スポーツに対して好きか嫌いかの立場からみると，表Ⅱ－2でもわかるように，見る方と行う方においては男性が活動タイプで女性がスペクティタータイプの傾向にあるが，男女とも見るのも行うのも好きが過半数を占める。これに対してスポーツはあまり好きでないという立場の者は表Ⅱ－2の通りで非常に少なく，スポーツを好きな方と嫌いな方とに二分すると，男性92.8%，女性84.4%が好きな立場にある。つまり，スポーツそのものを対象とした時の原点となる個人の立場は前向きであることがうかがえれる。

しかし，現在，スポーツを行う習慣に対してはどのような意識を持っているのか。表Ⅱ－1において男性80.0%，女性87.5%が足りないことを自覚している。つまり，スポーツは好きだけれど，それを行動に移し，習慣化するという段階では非常に低い数値となる。

また，表Ⅱ－1で，「健康を守るためにつとめて運動をしようとしていますか」という質問に対して男性70.6%，女性51.6%が「ハイ」と答えている。男女比較した場合，男性は「スポーツは好きであるがスポーツを行う習慣は足りない。しかし，つとめて運動を行いたい」という積極的なスポーツ志向型の意識を持つが，女性は「スポーツは好きであるがスポーツを行う習慣は足りない。しかしつとめて運動をすることについては躊躇する」という消極的なスポーツ志向型の意識となる。

次に，スポーツの楽しさ，よろこびは何かという，スポーツ活動への原動力となるものをみると，表Ⅱ－3の通り，「思い切り汗をかいたときの壮快感」男性60.6%，女性58.9%，「全力を尽くしてやりとげたという満足感」男性27.2%，女性23.4%となり，上位に直接身体を動かすことによって得られるスポーツの楽しさ，よろこびを抱いている。続いて，男性では「仲間との協力（チームプレー）」21.7%，女性では「友人が得られる」18.8%で，男女ともスポーツ活動を通して間接的に得られる楽しさ，よろこびを抱いている。
この結果は，実感によって生まれたスポーツ意識と判断できるものである。

次に，スポーツの将来性についてはどうであろうか。表Ⅱ－4のように，10年後のスポーツの将来性に関して，男女とも約80%が，余暇の増加，スポーツ人口の増加，生活におけるスポーツの重要性の増加を唱えている。

これは，現在，スポーツを行う習慣は足りないと思いつつも，今後，余暇の増加，生活の向上などに伴ってスポーツを行う者は増加するというスポーツ志向型の意識を抱いているものと理解できる。しかし，スポーツを行う場所，施設などについては，不安定な社会状勢の中では楽観的な見通しはつかず，男女とも約半数が縮少化，減少化にあると答えている。

以上，調査対象者のスポーツ意識を要約すると以下のようになる。

まず，男性ではスポーツは好きな立場であり，特に活動タイプである。しかし，スポーツ欲求は高いがスポーツの習慣化はまだ成り立っていない。つまり，スポーツ活動に対して積極的な意識を持つが，日常での実践となるとまだ問題を抱えている。女性では，男性同様スポーツは好きな立場であるが，男性と違いスペクティタータイプが多く含まれる。スポーツ活動の習慣化は男性同様未成立であるが，運動をしようとする積極的な姿勢は男性より劣る。

また，スポーツの楽しさ，よろこびについては男女ともスポーツ活動そのものから直接得られる壮快感，満足感が上位を占め，次にスポーツ活動を通して得られる友人，仲間との協力（チームワーク）となる。

スポーツの将来性については，男女ともスポーツ志向型の意識をもつが，社会，経済状勢に左右されがちな施設，場所の問題に関してはやや悲観的な意識を抱いている。

表Ⅱ－1　スポーツ活動

項目	M・F ハイ，イイエ，無記 人 %	M 人	M %	F 人	F %
あなたは過去（学生時代）スポーツクラブに加入していましたか	ハイ	132	73.3	107	55.7
	イイエ	43	23.9	85	44.3
	無記	5	2.8	0	0
あなたは健康を守るためにつとめて運動をしようとしていますか	ハイ	127	70.6	99	51.6
	イイエ	52	28.9	92	47.9
	無記	1	0.6	1	0.5
あなたは現在，職場又は地域のスポーツクラブ（定期的な練習をする）に所属していますか	ハイ	53	29.4	27	14.1
	イイエ	120	66.7	159	82.8
	無記	7	3.9	6	3.1
あなたは過去1年間蓬莱地区のスポーツ行事に参加したことがありますか	ハイ	61	33.9	52	27.1
	イイエ	114	63.3	133	69.3
	無記	5	2.8	7	3.6
あなたはスポーツをする習慣が足りないと思いますか	ハイ	144	80.0	168	87.5
	イイエ	36	20.0	23	12.0
	無記	0	0	11	0.5

表Ⅱ－2　スポーツの好き嫌い

無記F＝2名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
スポーツは行う方が好き	39	21.7	33	17.2
スポーツは見る方が好き	24	13.3	41	21.4
スポーツは見るのも行うのも好き	104	57.8	80	45.8
スポーツはあまり好きでない	13	7.2	28	14.6

表Ⅱ－3　スポーツの楽しさ，よろこび

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
全力を尽くしてやりとげたという満足感	49	27.2	45	23.4
思い切り汗をかいたときの壮快感	109	60.6	113	58.9
スポーツ後の飲食	15	8.3	5	2.6
友人が得られる	12	6.7	37	19.3
日常生活からの逃避	9	5.0	16	8.3
相手に勝ったときの歓び	11	6.1	10	5.2
相手との競争	6	3.3	3	1.6
仲間との協力(チームプレー)	39	21.7	36	18.8
技術の上達	15	8.3	11	5.7
記録の向上	3	1.7	0	0
そ　の　他	1	0.6	8	4.2
無記不明	4	2.2	9	4.7

表Ⅱ－4　スポーツの将来性

項目	ハイ，イイエ，無記 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
10年後には人々の余暇は益々ふえると思いますか。	ハイ	137	76.1	157	81.8
	イイエ	36	20.0	31	16.1
	無記	7	3.9	4	2.1
10年後には，現在以上にスポーツを行う人々がふえると思いますか。	ハイ	146	81.1	165	85.9
	イイエ	28	15.6	23	12.0
	無記	6	3.3	4	2.1
10年後には，スポーツは生活の中で重要な位置を占めてくるようになると思いますか。	ハイ	139	77.2	146	76.0
	イイエ	36	20.0	43	22.4
	無記	5	2.8	3	1.6
10年後には，土地問題などでスポーツを行う場所は縮少化，減少化の傾向になると思いますか。	ハイ	91	50.6	99	51.6
	イイエ	84	46.7	89	46.4
	無記	5	2.8	4	2.1

2．調査対象者のスポーツ活動の実態

前述したように，男女ともスポーツ活動の習慣は足りないと思い，また，女性はつとめて運動をしようと思う者は半数に過ぎない。このようなスポーツ意識のもとで，現在のスポーツ活動はどうであろうか。表Ⅱ－1の通り，「学生時代にスポーツクラブに加入していたかどうか」過去の経験を問うと，男性73.3%，女性55.7%が加入している。しかし，現在，「職場又は地域のスポーツクラブに加入している」男性は29.4%，女性は14.1%でクラブ継続者は大幅に減少している。

次に，現在のスポーツ活動量を，1週間のスポーツ活動時間から判断すると，表Ⅱ－5の通り0～30分が，男性33.2%，女性55.2%である。
1週間のスポーツ活動時間が0～30分は1日平均0～5分を意味し，スポーツ活動としてはほとんど“ゼロ”の状態である。

また，過去1年間に主に行ったスポーツ種目を3種目まであげてもらった結果の上位5種目は表Ⅱ－6の通りである。男性で野球（ソフト）が第1位にきているのは蓬莱地区のソフトボール熱をそのまま反映しているものとみなされるが，ゴルフ，スキー，水泳は季節的なスポーツ種目であり，継続的な種目はマラソン・ジョギングのみである。
女性では，バドミントン，卓球，バレーボール，スキー，マラソン・ジョギングの順である。
第1位のバドミントンは小学校，中学校の体育館ではほとんど行われておらず，広場で子供の相手などによるものと考えられる。

現在，職場又は地域のスポーツクラブへの非加入者は男性66.7%，女性82.8%にも及ぶ。
この非加入者の日常のスポーツ活動の方法はどうであろうか。表Ⅱ－7の通り，男性は「職場，地域でのスポーツ行事（大会）への参加」37.5%，「家で手軽にできるもの」29.2%，「子供の遊び相手」25.8%，女性は「子供の遊び相手」32.7%，「家で手軽にできるもの」24.5%，「サイクリング，散歩などの気晴らし」20.8%となっている。特に女性で「スポーツ活動はほとんどしていない」が23.3%にも及んでいるのが目立つ。

以上，要約すると以下のようになる。

男性約70%以上，女性約50%以上が学生時代スポーツクラブに加入していたにもかかわらず，男性約70%，女性約80%が現在スポーツクラブに加入しておらず，スポーツクラブ継続の困難さを示している。現在，スポーツクラブ加入者のスポーツ活動は1週間単位で一定の時間，継続的に行われているものとみなされる。しかし，非加入者のスポーツ活動の実態をみると，男性は，「職場，地域でのスポーツ行事(大会)への参加」，女性は「子供の遊び相手で体を動かす」，次に男女とも「家で手軽にできる体操」といったもので，継続的で一定の時間行われるスポーツ活動ではない。

このことから，1週間のスポーツ活動時間が0

～30分が一番多いという結論に達するのも理解できるものである。

また，年間のスポーツ種目別にみた活動状況は男性では，継続的に行われるものは少なく，シーズンに左右された活動状況であり，女性では，広場，体育館，公民館など身近かで手軽にできるスポーツ種目が多く行われている。

表Ⅱ－5　1週間のスポーツ活動時間

M F	時間 人 %	0～30分	30～1時間	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4～5時間	5～6時間	6時間以上	無記
M	人	58	22	28	29	18	8	5	10	2
	%	33.2	12.2	15.6	16.1	10.0	4.4	2.8	5.6	1.1
F	人	106	29	22	9	7	1	7	1	10
	%	55.2	15.1	11.5	4.7	3.6	0.5	3.6	0.5	5.2

表Ⅱ－6　過去1年間の主なスポーツ活動種目

M F	順位 種目 人 %	1	2	3	4	5
M	種目	野球(ソフト)	ゴルフ	マラソン ジョギング	スキー	水泳
	人	113	39	37	30	28
	%	62.8	21.7	20.6	16.7	15.6
F	種目	バドミントン	卓球	バレーボール	スキー	マラソン ジョギング
	人	48	31	29	21	19
	%	25.0	16.1	15.1	10.9	9.9

表Ⅱ－7　スポーツ活動の方法

項目 ＼ M・F 人.%	M 人	M %	F 人	F %
職場，地域のスポーツ行事(大会)のとき参加している	45	37.5	12	7.5
定期的にマラソンやジョギングなどをしている。	11	9.2	4	2.5
子供の遊び相手（キャッチボールなど）をして体を動かしている	31	25.8	52	32.7
サイクリング，散歩などによる気晴らしなどをもってスポーツ活動としている	10	8.3	33	20.8
ラジオ体操，腹筋，腕立てなど，家で手軽にできるものをしている	35	29.2	39	24.5
年1～2回家族全員でスキーとか海水浴を行う程度である。	13	10.8	14	8.8
スポーツ活動はほとんどしていない	10	8.3	37	23.3
その他	12	10.0	8	5.0
無記不明	17	14.2	14	8.8

Ⅲ　個人の内的条件に対するコミュニティスポーツ政策

先に，調査対象者のスポーツ意識，スポーツ活動の実態を概観したが，その中でスポーツに対して抱く意識はかなり高いことが判明した。しかしスポーツ活動の習慣，実践という段階になるとかなり低い数値となった。

スポーツ活動の習慣化にはどのような問題点があるのか。本章では，特に1週間のスポーツ活動時間が0～30分の男女と，現在スポーツクラブに加入できない理由が育児と家事労働にある女性の二つの立場からC,S政策を展開する。

調査結果によるこの二つの立場の対象者は，前者で男性180名中58名（32.2%）女性192名中106名（55.2%），後者では，女性159名中78名（49.1%）である。

1．1週間のスポーツ活動時間が0～30分の男女に対するC,S政策

1週間のスポーツ活動時間が0～30分の男性は58名，女性は106名でその職種は男性では専門的技術的，管理的職業，事務職が60%以上，女性は70%が家事労働（専業主婦）である。
職種から判断すると，時間的にはスポーツ活動を行い易い立場にある。

次に，この対象者の健康状態をみると表Ⅲ－1の通りであるが，これは男性180名，女性192名を項目別に単純集計したもの(以下,単純集計と略す)との比較では「やや不調」の傾向にある。

また，スポーツの好き嫌いをみると，表Ⅲ－2のように単純集計（表Ⅱ-2）による傾向より男女ともスペクティタータイプが多くなり，同時にスポーツはあまり好きでない者が増加してくる。

また，表Ⅲ－4の通り，スポーツの習慣が足りないと自覚している者は男女とも約90%以上に達しつとめて運動をしようという積極的な姿勢に対して男女とも過半数以上が消極的である。

このことは，表Ⅲ－4でわかるように，蓬莱地区のスポーツ行事への参加状況にもみられ，男女とも約70%以上が不参加である。その上，約60%の男女が今後のスポーツ行事には不参加と答えている。これは単純集計をはるかに上回っている数値である。

しかし，この対象者は，学生時代，男性74.1%女性48.1%がスポーツクラブの経験を有し，またスポーツの楽しさ，よろこびは実際に活動することによって得られる壮快感，満足感であり，また仲間との協力(チームプレー)であると実感している。

このように，単純集計と比較した場合，スポーツ活動時間が0～30分の者は確かにスポーツ意識スポーツ活動の実態面では低い。その原因は，身体の調子が悪いから，またスポーツは見る方が好きだからという単純な理由によるものであろうか。また，実際にスポーツを行う時間が全くないのであろうか。単に意識的，時間的な問題としてのみとらえてよいものであろうか。

そのようなことに対する原因究明とそれに対するC,S政策を展開するにあたって，ここでは，スポーツ活動時間がなぜ0～30分なのかということに対して,「なぜスポーツクラブに入らないのか」という問題に置き換えて考察を行う。それは,単に「スポーツをする」という場合は，自分の自由意志で自由な時にできる行為と解釈される。しかし「スポーツをする」という行為は，個人の内的，外的条件によっていろいろ規制され，なかなか容易にできる行為ではなく，そこにはいろいろな問題を含んでいるものと考えられるからである。

まず,「なぜスポーツクラブに加入しないのか」という質問に対して，男性では「時間的余裕がないから」41.2%,「練習の時間帯が合わないから」23.5%,「自分の好きな種目がないから」13.7%,女性では「子供が小さくて手を離せないから」33.3%,「家事労働が忙がしい」,「現在，健康を害している」,「あまり好きでないから」12.7%,「時間的余裕がないから」11.8%となっている。(表Ⅲ-3)男性の場合は就労時間からの制約，女性では育児が大きな障害となっているようである。

また,「今後，スポーツクラブに加入するとしたらどのようなクラブを望むか」については,表Ⅲ-5の通り男性は「好きな種目で好きな時できるスポーツクラブ」44.8%,「健康維持を目的としたスポーツクラブ」19.0%，女性の第1位は男性と同様で27.4%，次に,「健康維持を目的としたスポーツクラブ」,「親子一緒のファミリー的なスポーツクラブ」25.5%である。男女とも好きな種目で好きな時にできるスポーツクラブが第1位となっている。もともと，クラブというものは共通の目的をもった者が自発的に参加して結成したものである。しかし，新クラブ結成においてその動機はなかなか得難く，また，既成のクラブ加入でもいろいろ制約されることが多く，好きな種目で好きな時にできるクラブを待つのは時間の浪費となる。

以上のようなスポーツ意識，スポーツ活動の実態から，C,S政策を展開すると以下のようになる。

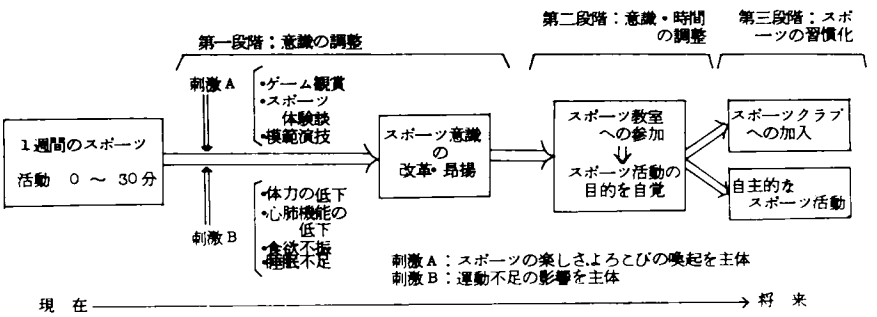
この対象者は，スポーツ活動の習慣の不足を自覚し，また学生時代スポーツクラブ加入者はその経験から，非加入者は過去のスポーツ活動の経験からスポーツの楽しさ，よろこびを実感している。つまり，スポーツに対して全く無意識の状態にあるのではない。現状において，労働時間の単縮，子供を放置してのスポーツ活動は不可能である。従って，過去に経験したスポーツの楽しさ，よろこびに対する潜在意識を呼び戻し，現在のスポーツに対する意識をいかに改革するかが先決となる。

図Ⅰのように，まず意識の改革にあたって刺激A，Bを与える。刺激Aはスポーツの楽しさ，よろこびの喚起を主体としたものであり，刺激Bは運動不足が身体に及ぼす様々な悪影響を主体としたものである。このような刺激によりある程度の意識改革が行われ，それがスポーツ意識の昂揚へとつながるものと考えられる。

ここまでを，第一段階とし意識の調整とする。

次に，表Ⅲ－4の通り，スポーツ教室の開講を望む者は男女とも半数以上に達していることより自由に参加できる様々なプログラムのスポーツ教室を数多く開講することである。しかも，短期間系統立ったものをあらゆる曜日，時間帯に開講する。そのスポーツ教室の内容として，健康維持

図Ⅰ　1週間のスポーツ活動時間が0～30分の者に対するC.S政策



を目的としたもの，親子で一緒にできるものなどが考えられる。そして，このスポーツ教室を通してスポーツ活動の目的を自覚させ，次の段階への橋渡しとする。ここまでを第二段階とし，スポーツの習慣化へ入る前の意識とスポーツへ費す時間の調整とする。

第二段階である程度スポーツ活動が生活の一部となってきたならば，スポーツクラブへの参加，あるいは自主的なスポーツ活動へと進む。

これを第三段階とし，スポーツの習慣化とする。

表Ⅲ－1　健康状態

M＝58名　F＝106名

M・F	人・% ＼ 状態	良好	普通	やや不調	悪い	無記不明
M	人	15	34	8	1	0
	%	25.9	58.6	13.8	1.7	0
F	人	16	63	25	2	0
	%	15.1	59.4	23.6	1.9	0

表Ⅲ－2　スポーツの好き嫌い

M＝58名　F＝106名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
スポーツは行う方が好き	12	20.7	13	12.3
スポーツは見る方が好き	14	24.1	30	28.3
スポーツは見るのも行うのも好き	24	41.4	37	34.9
スポーツはあまり好きではない	8	13.8	26	24.5

表Ⅲ－3　スポーツクラブに入らない理由

M＝51名　F＝102名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
自分の好きな種目がないから	7	13.7	4	3.9
入ろうとしているクラブのレベルが高くてついていけないから	3	5.9	4	3.9
練習の時間帯が合わないから	12	23.5	8	7.8
スポーツを行う時間的余裕がないから	21	41.2	12	11.8
スポーツを行う金銭的余裕がないから	0	0	3	2.9
子供が小さくて手を離せないから	0	0	34	33.3
家庭の理解がないから	0	0	0	0
家事労働が忙がしいから	2	3.9	13	12.7
現在，健康を害しているから	5	9.8	13	12.7
スポーツはあまり好きでないから	4	7.8	13	12.7
その他	4	7.8	7	6.9
無記不明	3	5.9	8	7.8

表Ⅲ－4　スポーツ活動

M＝58名　F＝106名

項目 ＼ M・F 人・% ＼ ハイ，イイエ，無記	M 人	M %	F 人	F %
あなたはスポーツをする習慣が足りないと思いますか　ハイ	54	93.1	100	94.3
イイエ	4	6.9	6	5.7
無記	0	0	0	0
あなたは健康を守るためつとめて運動をしようとしていますか　ハイ	26	44.8	38	35.8
イイエ	31	53.4	68	64.2
無記	1	1.7	0	0
あなたは過去1年間蓬莱地区のスポーツ行事に参加したことがありますか　ハイ	14	24.1	22	20.8
イイエ	43	74.1	82	77.4
無記	1	1.7	2	1.9
今後，あなたは蓬莱地区のスポーツ行事に積極的に参加していきたいですか　ハイ	23	39.7	34	32.1
イイエ	33	56.9	69	65.1
無記	2	3.4	3	2.8
今後，蓬莱地区でスポーツ教室を開講してほしいですか　ハイ	30	51.7	62	58.5
イイエ	22	37.9	38	35.8
無記	6	10.3	6	5.7

表Ⅲ－5　スポーツクラブの性格

M＝58名　F＝106名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
自分の好きな種目で，好きな時にできる（強制的でない）スポーツクラブ	26	44.8	29	27.4
試合を中心としない，チーム仲間との交流を目的としたレクリエーション的なスポーツクラブ	6	10.3	6	5.7
試合を中心とした（定期的な練習を要求）スポーツクラブ	1	1.7	1	0.9
健康維持を目的としたスポーツクラブ	11	19.0	27	25.5
親子で一緒にできるファミリー的なスポーツクラブ	8	13.8	27	25.5
その他	0	0	1	0.9
無記不明	6	10.3	15	14.2

2．育児，家事労働がスポーツクラブ加入及びスポーツ活動の障害となっている女性に対するC,S政策

対象の女性は159名中，78名で49.1%にも及ぶ。蓬莱町の女性の年令構成を調査結果（表Ⅰ－1）からみると，20代後半から30代前半が45.8%を占め約半数は年令的に育児期間を抱えている。

そのようなことから，この育児及び家事労働は女性のスポーツクラブ加入又はスポーツ活動にどのような影響を与えているのかを探るのは重要な問題であり，それに対するC,S政策はどうあるべきかを明らかにすることが要求される。

まず，意識面のスポーツに対する好き嫌いでは表Ⅲ－6の通り，活動タイプである。また，表Ⅲ

－7の「今後，スポーツクラブに加入したいかどうか」では60%以上が加入を希望している。同様に「今後，蓬莱地区のスポーツ行事へ積極的に参加するか」に対して半数以上が望んでいる。

このようなことから，育児，家事労働でスポーツ活動が妨げられている女性は，年令の若さもプラスされて非常に高いスポーツ欲求となっている。

しかし，その実態はどうであろうか。

表Ⅲ－8をみると，1週間のスポーツ活動時間は0～30分が59.0%に及び，単純集計よりも上回った数値である。また，そのスポーツ活動は表Ⅲ－9のように「子供の遊び相手をして体を動かす」44.9%，「サイクリング，散歩などの気晴らし」26.9%，「スポーツ活動はほとんどしない」20.5%となっており，継続的で汗をかくようなスポーツ活動はほとんど皆無の状態である。

また「今後，スポーツクラブに入るならばどのようなクラブを望むか」，表Ⅲ-10によると，42.3%が「親子で一緒にできるファミリー的なスポーツクラブ」を望み，次に，「自分の好きな種目で好きな時にできるもの」17.9%，「健康維持を目的としたもの」15.4%となっている。単純集計でも同様な傾向にあるが，比較すると親子で一緒にできるスポーツクラブの希望が非常に高い。

以上のようなスポーツ意識，スポーツ活動の実態からC,S政策を展開すると以下のようになる。

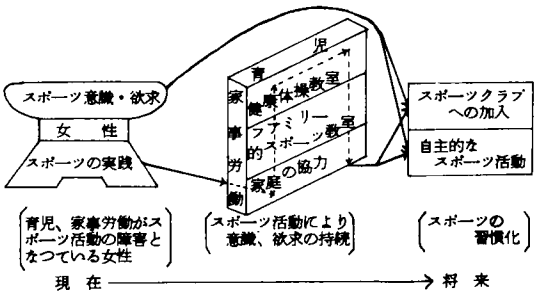
スポーツ意識，スポーツ欲求は非常に高く，それは育児，家事労働という障害を跳び越えた存在にある。しかし，スポーツ実践という現実問題になると育児，家事労働は大きなカベとなって現われる。家事労働は1日の生活時間内で処理できる問題であるが，育児はある一定の期間拘束されるという事態にまで及ぶ。スポーツの習慣化が絶たれるのは何らかの理由により長期間スポーツ活動に空白が生じるのも一因と考えられる。この育児期間もその要因となりうるものであり，この期間にスポーツ意識，スポーツ欲求を持続させることは重要なことである。

従って，この期間のC,S政策では意識の改革，昂揚ではなく，第1にスポーツ意識，スポーツ欲求の持続を考慮に入れるべきである。

図Ⅱのように，この期間のスポーツ活動は育児，家事労働というカベを避けて行うのではなく，それらを含んで作成されたプログラム，つまり，親子で一緒にできるもの，家庭の協力のもとに家族全員で参加できるもの，また，健康維持を目的としたスポーツ教室などへの参加が望まれる。

このようなスポーツ教室への参加は，高いスポーツ意識，スポーツ欲求の持続をはかると同時にスポーツの実践も可能とする。育児からの開放後は，スポーツクラブへの加入，又は自主的なスポーツ活動への移行もスムーズに運び，スポーツの習慣化も可能となるものと考えられる。

図Ⅱ　育児，家事労働者に対するC,S政策



表Ⅲ－6　スポーツの好き嫌い

F＝77名 78

項目 ＼ M・F 人・%	F 人	F %
スポーツは行う方が好き	18	23.1
スポーツは見る方が好き	14	17.9
スポーツは見るのも行うのも好き	34	43.6
スポーツはあまり好きでない	11	14.1
無　記　不　明	1	1.3

表Ⅲ－7　スポーツ活動

F＝78名

項目	ハイ・イイエ・無記 ＼ F 人・%	F 人	F %
あなたは将来スポーツクラブに加入したいですか	ハイ	48	61.5
	イイエ	28	35.9
	無記	2	2.6
今後あなたは蓬莱地区のスポーツ行事に積極的に参加していきたいですか。	ハイ	42	53.8
	イイエ	34	43.6
	無記	2	2.6

表Ⅲ－8　1週間のスポーツ活動時間

F＝78名

F ＼ 時間 人・%		0～30分	30～1時間	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4～5時間	5～6時間	6時間以上	無記
F	人	46	15	6	5	1	0	2	0	3
	%	59.0	19.2	7.7	6.4	1.3	0	2.6	0	3.8

表Ⅲ－9　スポーツ活動の方法

F＝78名

項目 ＼ F 人・%	F 人	F %
職場，地域のスポーツ行事（大会）のとき参加している	5	6.4
定期的にマラソンやジョギングなどをしている	3	3.8
子供などの遊び相手（キャッチボール）をして体を動かしている	35	44.9
サイクリング，散歩などの気晴らしなどをもってスポーツ活動としている	21	26.9
ラジオ体操，腹筋，腕立てなど家で手軽にできるものをしている	13	16.7
年に1～2回家族全員でスキーとか海水浴などを行う程度である	9	11.5
スポーツ活動はほとんどしていない	16	20.5
その他	3	3.8
無記不明	4	5.1

表Ⅲ－10　スポーツクラブの性格

F＝78名

項目 ＼ F 人・%	F 人	F %
自分の好きな種目で，好きな時にできる(強制的でない)スポーツクラブ	14	17.9
試合を中心としない，チーム仲間との交流を目的としたレクリエーション的なスポーツクラブ	8	10.3
試合を中心とした（定期的な練習を要求）スポーツクラブ	3	3.8
健康維持を目的としたスポーツクラブ	12	15.4
親子で一緒にできるファミリー的なスポーツクラブ	33	42.3
その他	0	0
無記不明	8	10.3

Ⅳ　まとめ

調査結果から得られた個人のスポーツ意識，スポーツ活動の実態を概観した結果，男女間にスポーツ意識，スポーツ欲求の差がみられた。

つまり，男女ともスポーツは好きな立場が大半を占めるが，女性ではスペクティタータイプが多くまた，男性は健康のためにつとめて運動をしようという積極的な姿勢であったが，女性ではその姿勢が男性より弱い。

スポーツ活動の実態においては，男性約70％以上，女性約50％以上が過去，学生時代スポーツクラブに加入していたが，現在に至っては男性約30％女性約14％の加入状況で，スポーツクラブの継続の困難さを示した。

また，1週間のスポーツ活動時間が0～30分に該当する男性は約32％，女性約55％にも及び，その活動内容は男性「職場又は地域でのスポーツ行事（大会）への参加」，女性「子供の遊び相手をして体を動かす」，次に男女とも「ラジオ体操，腹筋，腕立てなど家で手軽にできるもの」であり，定期的でしかも継続的なスポーツ活動はなされていないのが現状である。

以上のような個人のスポーツ意識，スポーツ活動の実態にあって，今後，個人がスポーツ活動を起こす場合には様々な要因が付随する。

本研究では特に，1週間のスポーツ活動時間が0～30分という者はどのような要因を背負っているのか，それに対するC,S政策はどうあるべきか，また，スポーツクラブに加入したいが育児，家事労働が障害となっているという，その要因が明確な者に対するC,S政策はどうあるべきかという二つの立場から考察を展開してきた。

それぞれの立場へのC,S政策は以下の通りである。まず，1週間のスポーツ活動時間が0～30分の者は，単純集計に比較してスポーツ意識，スポーツ活動の実態は一般的に低い数値を示した。しかし，この対象者のうち過去スポーツクラブに加入していた者は，男性約74％，女性約48％にも及び，またスポーツの楽しさ，よろこびはスポーツ活動から直接得られる壮快感，満足感であることを実感している。

従って，潜在意識として潜んでいるスポーツ意識の喚起のために，様々な刺激を与え，次に，スポーツ教室などに参加することにより，スポーツ活動の目的を自覚させ，最終的にスポーツの習慣化をはかることがこの対象者へのC,S政策と考えられる。

次に，スポーツクラブに加入できない要因が育児，家事労働にある女性に対するC,S政策であるが，この対象者はスポーツ意識においては単純集計にみられる者より一般的に高い数値を示している。スポーツクラブへの加入を希望し，地区でのスポーツ行事への参加を望むなど，スポーツ欲求は非常に高いものを示している。

しかし，いざスポーツ活動の実践という問題になると，約60％が1週間のスポーツ活動時間が0～30分という活動状況であり，その活動内容はキャッチボールなど子供の遊び相手が主で，定期的

なものではない。

従って，この対象者に対するC,S政策はスポーツ意識の改革，昂揚ではなく，スポーツ意識，スポーツ欲求を障害なくスポーツ活動ができるまで持続させることにある。そのためには，育児，家事労働を避けるのではなく家庭の協力のもとに様々なスポーツ教室へ参加し，それを通してスポーツ意識，スポーツ欲求を持続させ，スポーツの習慣化をはかることにある。

本研究は，蓬莱町居住者を対象としたものであるが，1週間のスポーツ活動時間が0～30分の者，スポーツクラブ加入の障害が育児，家事労働にある女性は，蓬莱町に限らず多数存在するものと思われる。この対象者へのC,S政策は，対象者の居住環境などにも左右されるが，前者においては，スポーツ意識の改革という個人の内的な側面から政策を与え，後者には，抱いているスポーツ欲求を何かの方法で持続させることがなすべきC,S政策であると一般的に言えるものと考えられる。

以上が本研究の「まとめ」であるが，次回においては，個人のスポーツ欲求と行政との関係におけるC,S政策を展開してみたい。

参考文献

地方自治研究資料センター編
「コミュニティづくり続本」　第1法規　1980

現代社会学会議編集
「現代社会学」　9　1978　Vol. 5　No.1　講談社

体育社会学研究会編
「コミュニティ・スポーツの課題」　道和書院 1975

文部省体育局スポーツ課内
社会体育研究会編集
「これからのコミュニティ・スポーツ」
ぎょうせい　1977

沢登貞行，村上克己　共著
「コミュニティ・スポーツへの挑戦」
不昧堂出版　1980

その他の資料

（付）　表1，表2，表3

表1　希望するスポーツ集団

M＝180名　F＝192名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
同性同志の集団	64	35.6	76	39.6
異性混合の集団	84	46.7	79	41.1
無　記　不　明	32	17.8	37	19.3
職域を中心とした集団	44	24.4	17	8.9
地域を中心とした集団	107	59.4	130	67.7
無　記　不　明	29	16.1	45	23.4
ほぼ同年令層の集団	46	25.6	85	44.3
年令の様々な集団	110	61.1	83	43.2
無　記　不　明	24	13.3	24	12.5
技術程度のほぼ同じ団員	67	37.2	92	47.9
技術程度の様々な集団	83	46.1	69	35.9
無　記　不　明	30	16.7	31	16.2

表2　希望するスポーツ施設

M＝180名　F＝192名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
住居の近くにあるが簡素なスポーツ施設	119	66.1	140	72.9
少し遠いが本格的なスポーツ施設	36	20.0	30	15.6
無　記　不　明	25	13.9	22	11.5
金はかかるがサービスのよいスポーツ施設	14	7.8	10	5.2
金はかからないがセルフサービスのスポーツ施設	144	80.0	159	82.8
無　記　不　明	22	12.2	23	12.0
会員制で豪華な気分を味わえるスポーツ施設	9	5.0	5	2.6
開放的で手続きなどいらないスポーツ施設	152	84.4	167	87.0
無　記　不　明	19	10.6	20	10.4

表3　希望する指導者

M＝180名　F＝192名

項目 ＼ M・F 人・%	M 人	M %	F 人	F %
礼儀正しい指導者	66	36.7	73	38.0
ざっくばらんな指導者	93	51.7	101	52.6
無　記　不　明	21	11.7	18	9.4
安全をモットーとした指導者	110	61.1	129	67.2
進歩をモットーとした指導者	52	28.9	38	19.8
無　記　不　明	18	10.0	25	13.0
元気のよい若い指導者	55	30.6	81	42.2
経験をつんだ老練な指導者	104	57.8	89	46.4
無　記　不　明	21	11.7	22	11.5

A Study of Community Sports (I)
with Reference to the Policy of Community Sports toward Individual Inhabitants in Some Mental and Domestic Conditions

Shûichi ARAYA

One of the primary factors of the policy of community sports is to develop in all the inhabitants a strong love for sports, not to mention the ballance between the administrative supply and the inhabitants' demands for the facilities such as gymnasiums, athletic grounds, sporting apparatus of instructors.

In this paper the two concrete proposals on community sports will be advanced, chiefly by discussing the individual love for sports and actual state of physical activities.

The inhabitants referred to in this paper are classified as follows;[A]: men and women who spare only 0-30 minutes in a week for physical activities. [B]: women who have a great love for sports but cannot join an athletic club owing to their childcare and household affairs.

A Proposal in the Case of [A]

First, to develop in them a love for sports by providing various stimuli on sports; secondly, to urge them to be conscious of the object of physical activities by making them join sporting schools; thirdly, to make them join an athletic club or take part in a sport voluntarily, and build up a habit of practicing a sport.

A Proposal in the Case of [B]

First, to make them keep taking an active part in sports, by joining sporting schools for the family or gymnastic schools for health with the united support of their families; secondly, to make them a member of an athletic club or take part in a sport independently, and keep a habit of practicing a sport, after they have been free from their childcare and household affairs.